

## 新世界

### リベラルアーツとともに科学技術を紡ぎだす 人材を育てる図書館

本学は「東京物理学講習所」として1881年(明治14年)に創設され、1883年(明治16年)に「東京物理学校」に改称しました。1949年(昭和24年)学校教育法により「東京理科大学」と改称し、新制大学としてスタートしました。「理学の普及を以って国運発展の基礎とする」を建学の精神に掲げ、約130年の歴史があります。図書館は1928年(昭和3年)、約400冊で始められた寺尾文庫が原型です。当時は書籍の数さえ、ままならない状況でしたが、以後約100年で、全体の蔵書数は約100万冊にまで増加しました。

2013年4月、神楽坂キャンパスより理学部第一部応用物理学科、九段キャンパスより工学部第一部建築学科・電気工学科・機械工学科、工学部第二部建築学科・電気工学科、野田キャンパスより基礎工学部電子応用工学科・材料工学科・生物工学科の4学部9学科とそれぞれに併設する大学院が移転し、東京都葛飾区に新キャンパスを開設しました。(学部学生：2906人、大学院生：858人 2014年5月1日現在)

コンセプトに挙げる「新世界」とは新しいキャンパスを新大陸とみなして、理学の普及をもって未来の世界へと繋げる建学の精神の再生でもあります。

図書館の正面と後方からの景観はシンメトリーで誰もが心を引き寄せられる外観を呈しています。作曲家ドボルザークの「新世界」をイメージして建てられ、館内に入ると貸出カウンター前のホールから天井に伸びる書架は階層をつないでいるかのように、書架が繋がって見えます。コロシアムの内部のように下層から上層に向けて配架された書籍はインテリアの一部として、利用者の目に映り、本の持つ重厚性を感じさせます。電子化が進み、本が価値を失いつつある昨今、本の価値を再評価してもらうために工夫された、「新世界」に繋がる空間の一部です。本学では近年特に洋書の利用が少なく、以前は奥の方に配架していましたが、葛飾図書館では、全面に押し出すことにより、利用頻度も上がり2013年度と比較しますと、2014年度は約2倍に貸出数が増加しました。今後も多くの図書を利用して欲しいと思います。

本学図書館内には学習相談室以外に、ラーニングcommonsとしての設備がありませんでしたが、館内にラーニングcommonsを充実させることで、より快適に学生がグループを作り、自由に学習できる空間が実現しました。グループ学習室や多目的室の利用が混雑している場合でも、館内にはグループで学習できる空間が多種・多様に工夫されています。

葛飾図書館は約1万種の電子ジャーナル、約4万種の電子ブック及び数種のデータベースが活用でき、時代の流れに沿った、紙の本と電子ジャーナル・電子ブックのハイブリッド方式による図書館です。葛飾区と相互協力の基本協定を締結しているため、本学学生は葛飾区立中央図書館を自由に利用することができ、葛飾区在住の方も葛飾図書館が利用できます。葛飾キャンパスは主に工学系の学科で編成されていますが、不足しがちな人文系の資料は、多種多様な方法で補っています。人間形成に大切なリベラルアーツを身につけ、科学の基礎を学び、厳しい指導のもとで、単なる知識から応用力を備えた高い技術へと昇華させ、自らが「新世界」を切り開く素養と力を身に付けていくことを目的に、葛飾図書館は建設されました。このキャンパスで学び取ったりベラルアーツから、人々の生活に役立つ様々な技術を織り成し続けて欲しいと思います。



キャンパスモールから図書館を見る